天の川

春日信彦



ゆう子シリーズ⑪ゆう子は、校長着任を祝うために篠田校長を訪れた。そして、会話が進むにつれて、悩みを打ち明けていた。第一歩を踏み出せない臆病なゆう子に、校長は、自

色のない夢

　美緒は、父親が急死してから、一人でいると寂しいから下宿させてほしい、と度々ゆう子を通してゆう子の家族に懇願していた。だが、ゆう子の家族は、そのことで何度か家族会議をしてみたものの、ＪＫを預かることに不安を感じ、承諾の返事を渋っていた。数週間が過ぎても快諾が得られないことにいら立ちを感じた美緒は、このままでは、らちが明かないと思い、ついに、ゆう子の母親、陽子に直談判する決意をした。

　金魚の糞のようにゆう子の後について、家に訪問した美緒は、自己紹介をすると、礼儀正しく深々とお辞儀をし、厳かにキッチンリビングに上がり込んだ。陽子は、下宿を願い出ている例のＪＫが直談判にやってきたと直感した。美緒は、腰かけるように椅子をすすめられたが、誠意を示そうと直立不動のまま、か細い声を喉の奥から絞り出した。「誰も身寄りがないんです、見捨てないでください。お願いです、下宿させてください」とうそ泣きしながら陽子に懇願した。あっけにとられた陽子は、ドスンと腰を落とし、視線をゆう子に向けた。

　今どきのＪＫってこんなんかしらと思った陽子は、しばらく黙ったまま、承諾の返事をしなかった。ゆう子は、美緒一人の生活では、寂しくて受験勉強が出来ないのではないかと心配し、今年一年という約束で下宿を母親にお願いした。それでも、陽子は煮え切らなかった。じっと、美緒は、陽子のしかめっ面を見つめ返事を待ってみたが、黙り込んだ陽子は、人差し指でこつんこつんと意味不明のメッセージを誰ともなく送り始めた。

　これほど渋るのは、もしかすると金銭的なことではないか、とピンと来た美緒は、下宿代として毎月１０万円を支払いますとマジな顔つきで申し出た。すると、下宿代１０万円と聞いた陽子の気持ちが急変した。一瞬疑わしい顔つきをしたが、生命保険金が振り込まれたことを聞いていた陽子は、女優のような上品な笑顔でゆっくりうなずきながら、すっと立ちあがった。そして、あたかも、美緒の下宿部屋としてすでに準備していたかのようなそぶりで、一階の客間に案内した。

　客間として使っていた一階の和室を下宿部屋として勧められた美緒だったが、ゆう子から英語を学びたいと同室を懇願した。ゆう子は、同室だと二人の関係に亀裂ができるのではないかと若干心配したが、逆に、その亀裂が功を奏して、お互いの自立を促すようにも思え、美緒の切なそうな顔にうなずいた。ゆう子と同じＦ大学を志望している美緒であったが、現在の成績では絶望的だった。このこともあり、ゆう子は、美緒の力になりたいという気持ちもあった。

　ゆう子と同居ができるようになった美緒は、毎日が楽しそうであった。５時過ぎには帰ってくる美緒は、夕食の準備を手伝ったり、キッチンの掃除をしたりと、陽子の手足となって働いた。下宿代を支払ってくれるだけでなく、家事手伝いをしてくれる美緒をわが子のように思えて、陽子は、ゆう子と同じようにかわいがるようになった。また、父と二人暮らしだった美緒は、母親ができたようで、お手伝いをするのがうれしくてたまらなかった。

一方、グラドルのゆう子は、入学式の当日から、多くの男子から声をかけられ、今では、キャンパスクイーン扱いされていた。すでに、３人のボーイフレンドができ、毎日のようにデートに誘われていた。でも、なぜか、学生生活に充実感が持てなかった。というのも、教員を目指して大学に入学したものの、女優への夢をあきらめきれなかったからだ。一度、上京の思いを家族全員がそろった食事中に打ち明けようと思ったが、結局、口には出せなかった。

何度か、母親の機嫌がいいときに思い切って打ち明けようと思ったが、やはり、母親の顔を見ると気後れして言い出せなかった。入学して早々、突然退学して、かつてから誘われていた東京の芸能プロダクションに行くなどとは、自分ながら正気の沙汰ではないように思え、だんだんと落ち込むようになっていた。美緒にも相談したが、「まったくわかんない」とそっけなく軽くあしらわれた。英文学の講義を受けていてもうわの空で、アメリカ人講師スティーブのネイティブな朗読も子守唄のように右の耳から左の耳に素通りしていた。

だが、ゆう子には、大学に行く唯一の楽しみがあった。それは、イケメンスティーブ先生の流ちょうな発音を聞くことだった。入学してすぐに何人ものボーイフレンドはできたが、ちやほやしてくれたり、容姿をほめてくれる彼らと話していても、一向に楽しくなかった。ところが、スティーブの天使のような甘い声を聴いているだけで、心地よい気分になれた。

若干２８歳のスティーブは、スタンフォード大学の比較文学博士課程を修了すると、日本文学の研究のため、昨年の１１月にサンフランシスコから福岡にやってきた。イギリス、アメリカ、フランス、ドイツ、日本等における比較文学研究を言語学と宗教学の両面からアプローチしていたが、特に、キリスト教の影響を受けた欧米の文学と異なり、仏教の影響を受けた日本文学に関心を持った彼は、“仏教の美徳が生み出した日本文学”という斬新な論文を学生時代に発表し、マスメディアでも脚光を浴びていた。

スティーブは、日系アメリカ人で祖父は福岡県出身の日本人であった。原子物理学を研究していた祖父は、戦前に渡米し、カリフォルニア大学バークレー校で原子爆弾の研究開発に携わっていた。父親は、サンフランシスコで歯科医院を開業していたが、三男の彼は、祖父の影響を受けて日本文化に幼少のころから興味を持っていた。祖父から日本語を学ぶにつれて、さらに日本語に興味を抱いた彼は、ジュニアハイスクールのときから外語学院で日本語を学ぶようになった。

日本の大学の講師になった目的は、第一は、日本文化を体感すること第二は、方言と呼ばれる多様な日本語を学び、近代日本文学をより深く研究することだった。彼の日本語能力は、日本人と比較しても同等、それ以上で、英語と日本語両面における冗談を交えた講義は、学生たちに人気があった。飽きの来ない講義にしようとアメリカで起きている事件、アメリカの芸能界、アメリカの軍隊などについての話を講義に交え、ますます、彼の講義は人気を増し、今では、他校の聴講生も増えていた。

学習意欲をなくしてしまったゆう子であったが、スティーブ先生に会えることだけを楽しみにどうにか大学に通っていた。入学当初は、演劇部に入部する予定だったが、なぜか、部活に対する意欲もなくなり、帰宅部になっていた。バイトも土曜の家庭教師だけだった。でも、火曜と金曜のスティーブ先生のゼミには、必ず出席していた。ゼミでは、日本語で学生に話しかけ、学生生活についての話題も取り入れてくれた。

ゼミでは、テーマが与えられ、グループごとに分かれ、英語でのディスカッション形式で進められていた。７月のテーマは、将来の夢、やりたいこと、だった。各自約５００文字程度にまとめ、発表するのであったが、ゆう子の頭には夢らしき将来の自分の姿は現れなかった。英語教師の夢も女優の夢も、書きかけのデッサンのようで、必死になって心のキャンパスに色鮮やかな夢を描こうと筆を動かしても、筆の跡には色は現れなかった。

デートに誘われない日は、図書館で時間をつぶし帰宅していた。静かな図書館の片隅で物思いにふけるひと時が、世間体の仮面を取り外せる唯一の時間となっていた。なぜか、その時だけは、宇宙遊泳をしているようで、心が癒され、あらゆるしがらみから解き放たれたような気持ちになれた。自分の未来を宇宙のキャンパスに描き始めると、スティーブ先生とそっくりな声の天使が、どこからともなく話しかけてきた。そして、天使との会話を楽しむようになった。

What’s your dream? What you wanna do in the future? 天使は、いつもの質問を始めた。「将来、何をしたいの？」と聞かれても、わかんない。でも、せっかく、英語を勉強してるんだから、英語を役立てたいとは、思っているんだけど、それも、なんだか、今一つ、ピンと来ないのよ。優柔不断な怠け者というか、やる気がないダメな奴というか、教師になりたいという夢は、ママを喜ばすためのリップサービスだったようで、マジじゃなかったのかもしんない。

What kind of personality do you think you have?　え、突然そんなこと言われても、困るわよ。自分でもわかないし、考えたこともないし。まあ、優柔不断で楽天的なのは、確かだから、I’m basically optimistic and cheerful, I think. ってところじゃない。いつから、こんなダメ女子になったのか、いやになっちゃう。中学の頃は、オリンピックを夢見る少女だったんだから。もう一度、あの頃に戻れるといいんだけど、また、バカなことを言ってる。ほんと、いやになっちゃう。

大好きだった野球バカも勝手に死んじまったし。ほんと、ヤローって、勝手よ。ブサイクヤローもなんというか、人はいいとは思うんだけど、今一つ、ピンとこないし。ボーイフレンドは、ちやほやしてくれるけど、恋愛って感じじゃないし。毎日が、からっぽで、いやになっちゃう。なんだか、自分一人が、取り残されて、周りの女子たちは、どんどん幸せになっていくみたい。ゆう子って、不運の星に生まれたっていうの？

あ〜〜、いやだ、いやだ。こんな愚痴ばかり毒づいて、夢に向かって、第一歩も踏み出せない。恋愛も怖気づいて逃げてばかり、美緒のように青春を謳歌できないなんて、なんて臆病者か。青春は、恋愛を楽しまなくっちゃ、なんて美緒は言うけど、片思いもできなくて、いったいどうすればいいのよ。美緒のような冒険がどうしてできないんだろう。なんだか、二度と男子が好きになれないような気がする。いったい、ゆう子は、どうしたのよ。天子さん、何とか言いなさいよ。

I think most Japanese girls are a little timid. わかってるわよ、そんなこと。日本の女子は、欧米の女子とは違うんだから。積極的じゃないし、自分の意見もはっきり言えないし、男子にコクれないし、恋愛下手だし、日本の女子は、控えめなのが美徳ってされてるんだから。天子には、女子の気持なんかわかんないのよ。フ〜〜ンだ。忌々しい野球バカ、勝手に死んじまいあがって、クソ〜。

ゆう子さん、好きだった人を憎んではいけません。神は、あなたを見守っているのですよ。ゆう子さんの心の傷のことは、よ〜く分かっています。生きる上で大切なことは、憎むことであなく、愛することです。きっと、あなたを幸せにしてくれる男子が必ず現れます。憎むことを止めたとき、きっとあなたの王子さまはやってきます。本当は、ブサイクな男子のことが気になっているんじゃないですか？自分の気持ちに素直になれば、きっと、夢に色が現れると思いますよ。

天使は、他人事と思って、気楽なことを言ってくれるじゃない。簡単に好きだった男子を忘れることができるぐらいだったら、憎んだりしないわよ。やっぱ、天使は、男子の味方ね。女子の気持なんか、わかんないってこと。でも、確かに、憎むってのは、よくないような気がする。憎めば憎むほど、自分が嫌になるし、落ち込んでしまう。早い話、ゆう子は、意気地なしで、臆病者ってこと。恋愛ができないダメ女子ってこと。

Don’t blame yourself. そういわれても、ゆう子の現実だもの。どうしようもないんじゃない。あいつを憎み続けて、いつの間にか、おばあちゃんになるのかも。そういえば、百人一首にあったような。小野小町の歌だっけ。花の色は　移りにけりな　いたずらに　わが身世にふる　ながめせし間に　あ〜〜あ、こんな歌を思い出すなんて、絶望的じゃない。バッカみたい。ゆう子は、何歳よ。恋は、これからなのよ。

Love me little, love me long. それって何よ。ことわざにあったような？小さな恋を大切に、根気よく、育てなさいってことかな。まあ、わかんないこともないけど。小さな恋ね。あのブサイクのことを言ってるんじゃないでしょうね。でもね〜、ちょっと、今一つじゃない。ゆう子のタイプじゃないと思うんだけど。ブサイクの顔を見てると、吹き出したくなるのよ。もう、笑いが込み上げてきた。

Love covers many infirmities. それは知ってるわよ。Love is blind. ってことでしょ。あばたもえくぼ、っていうからね。でも、ブサイクがイケメンに見えることはないと思うんだけど。でも、ゆう子さんは、ブサイクのことが気になっているでしょ。そのうち、ブサイクがイケメンに見えてくるかも。ブサイクは、ゆう子さんのことを心から好きみたいじゃないですか。彼の思いは、ゆう子さんの心の中に次第に侵入していますよ。Love begets love.

え〜〜〜、そんな〜〜、次第にブサイクが好きになるっていうの。まさか〜〜。ゆう子の好みじゃないって言ったでしょ。Maid says nay and take it. え、そこまで言う。それはないわよ。でも、実際、かなり、ブサイクのこと気にしてるわね。確かに、ブサイクのことを好きだとは思ったことはないけど、ブサイクは、いやなことを忘れさせてくれる不思議な力を持ってるような気がする。男子って、顔じゃないってこと？

Never judge from appearances. まあ、そういうけど。やっぱ、ルックスが気になるし。優しいのは、よくわかるけど、あそこまで崩れてるとね〜、ちょっと。ブサイクか〜〜。天子さん、なんだか、少し気分が晴れてきたみたい。とにかく、思い切って、勇気を出して、恋愛をすることよね。男子のことなんて、何にもわかってないくせに、生意気言って、ごめんなさい。ゆう子って、こんな女子。いつも、ありがとう。

愛の説教

安田も無事Ｆ大学商学部に合格し、心に余裕ができたのかしばらくやめていた写真を撮り始めていた。鳥羽は、安田の部屋に呼ばれ、被写体としてポーズをとっていた。安田は、高校２年生の時までは、親の整備工場の跡を継ぐ覚悟だったが、高校３年の夏休みにリノと再会し、リノを好きになり、気持ちが急変した。安田は、自分以上に車いじりが好きな弟に家業の跡継ぎを任せることにした。そして、リノの願いをかなえるべく指原家の養子に入る決意をした。

安田とリノは、大学卒業後、結婚する約束を交わしていた。そのことは、二人だけの秘密で、鳥羽にも内緒にしていた。安田がゆう子と同じＦ大学に進学したと知った時、鳥羽は、目を丸くして驚いた。安田は整備士の資格を取るために自動車の専門学校に進学すると思っていたからだ。ゆう子の学生生活が気になっていた鳥羽は、安田からゆう子のことを聞き出そうと安田のモデルを快く応じていた。

筋肉美を数枚撮り終えた安田は、鳥羽に休憩を指示した。いつものように、渋い顔の安田は白の椅子に腰かけ、休憩を待ちかねていた鳥羽は青の椅子に腰かけた。腰かける否や鳥羽は、安田に声をかけた。「先輩、大学生活はどうですか？」一人の世界に入り込んだ安田は、渋い顔をして、フレッジにゆっくり歩いて行った。５００ミリリットルのアクエリアスのペットボトルを二本ぶら下げて、白い椅子に戻ってくると、一本を鳥羽に手渡した。

「いただきます」ペットボトルを手に取った鳥羽は、キャップをひねり取り、胃の中に放り込むように、ゴクゴクと喉を鳴らし、冷たいアクエリアスを流し込んだ。安田は、何か考え込んだような表情で、ゆっくり喉を冷やすように飲んだ。「どうも、今一つだな～。最近、マンネリ化して、陳腐な作品ばかりだ。もっと、斬新な、あっと言わせるような、前衛的な、そんなのがほしいんだが。やっぱ、俺には、才能がないってことかな～」

付き合いでポーズをとっているだけのモデルでしかない鳥羽にとって、写真の芸術性などはどうでもよかった。それより、ゆう子のことが気になっていた。「先輩、ゆう子先輩とは、たまには会いますか？」安田は、まったく意表を突いた質問に面食らった。「え、ゆう子？会うわけ、ないだろう。彼女じゃあるまいし。お前は、わけのわからん、やっちゃ。ゆう子のこと、まだ、思ってるのか。いい加減に、あきらめろ。お前の狙う相手じゃない」

鳥羽は、グサッと来たが、それでも、食い下がった。「いや、まあ。それは、分かっています。でも、ゆう子姫を一生お守りしたいんです。だから、まあ。ゆう子姫になにか、変な虫がつかないかと思って。やっぱ、なんといっても、グラドルですから、気になるんです。できれば、時々会って、様子を聞いてきてもらえませんか？」あまりにもバカげたお願いに、吹き出しそうになったが、ちょっと先輩ぶって、お説教してやることにした。

「本当に、お前は、おめでたい奴だ。この前にも、言っただろ。恋愛とは、平等なる精神によって成り立つんだと。お前のは、単なる片思いでもなく、恋愛でもない。ゆう子は、お前のことなどなんとも思っていない。こんなのは、恋愛じゃない。たいがいで目を覚ませ。お前は、ゆう子のなんなんだ？単なる奴隷か？一生守るって、正気の沙汰じゃない。自分が言っていることが、分かってんのか？」

目じりを下げて泣きそうな顔になったが、鳥羽の気持ちは変わらなかった。ペットボトルの口をくわえると、グイッとアクエリアスを流し込み、大きく深呼吸した。そして、深刻な表情で両手に握りこぶしを作り、つぶやき始めた。「いいんです。なんと言われようと。ゆう子姫にお仕えすると決めたんです。ゆう子姫を守るためだったら、命も惜しくありません。先輩、お願いです。ゆう子姫の写真を撮ってきてくださいよ。元気なゆう子姫の姿を見ないと、心配で、夜も眠れないんです」

これはかなりの重症と思ったが、引っ張って病院に連れていくことはできず、とりあえず、徐々に諭すことにした。「鳥羽、とにかく落ち着け。お前の気持ちは、よ〜〜〜く、分かった。でも、あまりの思い込みは、相手にとっても迷惑だ。一歩間違えば、ストーカーに間違えられる。冷静になって、考えてみろ。ゆう子には、すでに彼氏がいるはずだ。そこにお前が出しゃばって、ゆう子の恋愛を邪魔すれば、ゆう子は悲しむんじゃないか？ゆう子のことを思うんだったら、潔く、身を引け。それが男ってもんだ。分かるだろ」

ゆう子が悲しむと聞かされた鳥羽は、泣きそうな顔になり、うつむいてしまった。思い詰めて自殺するんじゃないかと不安になった安田は、鳥羽の気持ちを少しでも楽にしようと話を替えることにした。「鳥羽、元気を出せ。恋愛というものは、突然やってくるものだ。小田の歌にもあるじゃないか、ラブストーリは突然に。そう、そう、俺のことなんだが、大学を卒業したら、リノと結婚するつもりだ。だから、経営の勉強をするために、Ｆ大学に行くことにしたんだ。このことは、内緒だぞ」

泣きそうな顔をしていた鳥羽であったが、ひょいと顔を持ち上げた。「え、結婚。リノさんと。なんだ、そういうことですか。先輩だけ、いい思いをするってことですか。俺には、地獄に突き落とすようなことを言って。いいですよ、そうですか、よかったですね。もう、先輩には、相談しません。ゆう子姫のことは、自分の心の中にしまい込みます。ストーカーまがいなことは、一切しません。じっと耐えて、一生耐えて、心の底で、お仕えします」

これはちょっとまずいことを言ってしまったと後悔したが、後の祭りだった。このままでは、恨まれてしまうと不安になった安田は、何とかご機嫌を取ろうと頭をひねった。ポンと膝を叩いた安田は、作り笑顔で心にもないことを話し始めた。「おい、お前は、医学部志望だったよな。聞くところによると、医学部生は、モテるらしいぞ。来年、見事、医学部に合格すれば、いっぱしの医学部生じゃないか。もしかしたら、ゆう子が振り向くかも？」安田は、心の中でペロッと舌を出した。

鳥羽は、ニコッと笑顔を作った。身を乗り出した鳥羽は、泡を吹きながら話し始めた。「そうすか。医学部生は、モテますか？ゆう子姫も振り向いてくれますか？よっしゃ、まだ、脈はありってことですね」一瞬目を輝かせた鳥羽であったが、即座に、身を引くとトーンを落とし、静かに話し始めた。「いや、いいんです。高望みはしません。陰で見守るだけで、幸せなんです。医者になって、ゆう子姫をお守りします。それでいいんです」

高望みと聞いた時、学食からの素晴らしい眺めが頭に浮かんだ。そして、学食の入口でゆう子とばったり出会った時のことを思い出した。「そうだ、この前、ゆう子と学食でばったり会ったんだ。その時、面白い話を聞いたぞ。聞きたいか？」鳥羽は、身を起こし、マジな顔つきになった。「ちょっと、ゆう子先輩と会ってるじゃないですか。隠すなんて、どういうことですか？」

安田は、即座に返事した。「いや、マジ、今思い出した。隠すつもりなんか。本当だ。そのとき聞いたんだが、ほら、写真部に入って、一か月もしないうちにやめた小太りでチビの女子がいただろ。憶えてるか？そいつ、美緒っていうんだが。そいつが、ゆう子のうちに下宿してるんだってさ。そして、来年、そいつ、Ｆ大学を受験するらしい。そんで、ゆう子は、そいつに、英語を教えているとさ。でも、かなりバカで、手に負えないって言ってた」

鳥羽は、美緒と聞いて小太りでチビの女子の顔を思い出していた。一度うなずき、鳥羽は話し始めた。「入ってすぐにやめた女子でしょ、憶えてますよ。１年の時、同じクラスだった美緒です。美緒が、ゆう子先輩のうちに下宿してるんですか。意外なこともあるものですね。私立文系クラスのダチから聞いたんですけど、確か、今年の２月、お父さんが病気でなくなったと聞いてます。だから、ゆう子先輩のところに下宿したんだと思います。美緒は、ゆう子先輩と同じ新体操部でしたよ。へ〜〜、下宿ですか」

安田は、名案が浮かんだという顔で鳥羽の左肩をポンと叩いた。ニコッと笑顔を作った安田は、口をとがらせて話し始めた。「おい、幸運がやってきたじゃないか。美緒は、ゆう子と同居してるんだぞ。美緒から、ゆう子の話が聞けるってもんだ。早速、美緒を捕まえて、聞くといい。ゆう子の私生活が聞けるぞ。グラドルって、どんな色のパンツ穿いてるんだろうな？うまく聞き出せたら、俺にも聞かせろよな。なんだか、興奮してきた」

共感

美緒がゆう子の家に下宿していると聞いて、どうにかして話ができないかと思案していた。鳥羽の国立理系クラスは３階で、美緒の私立文系クラスは２階ということもあって、出会うことも、話す機会もまったくなかった。時々、昼休みの時間に２階の廊下を何気に歩いたりしたが、美緒と出くわすどころか席にいる姿も見ることがなかった。下校時に美緒を捕まえようと思ったが、国立理系クラスと私立文系クラスの下校時刻は全く違っていた。

ところが、七夕の７月７日（木）、朝寝坊して慌てて飛び出した鳥羽は、弁当をカバンに入れるのを忘れてしまった。やむなく、２００円持っていた鳥羽は、学食の横の売店で１３０円のイチゴジャムパンを買うことにした。売店でジャムパンを手に取り、売店のおばちゃんに２００円を手渡した時、偶然にも一人で学食に入っていく美緒の姿がチラッと目に入った。

小さな池のある中庭のベンチでジャムパンをかじる予定だったが、これは、神様のお導きと感謝して、ジャムパン片手に学食の入口にかけて行った。入口から美緒の後姿を見つめていると、トレイを両手に持ってゆっくり歩き、窓を背にして腰かけた。いつの間にか、鳥羽の足は学食の中を歩いていた。美緒の斜め前の席に腰かけるとチラッと美緒に目をやった。一瞬目が合うと、苦笑いをして声をかけた。「ここ、空いていたみたいだったから」声をかけるや否やジャムパンにかじりついた。

鳥羽の話を無視するかのように、美緒は、黙ってうどんをつまみ上げ、口の中に押し込んだ。いつもは弁当で、美緒も学食で食べることはなかったが、たまたま、この日は、朝寝坊して弁当が作れず、飛び出してきていた。お腹がすいていた美緒は、犬ががっつくように麺を口に放り込んでいた。まったく反応がない美緒に何と話しかけていいかわからず、とにかく、口から出る言葉に任せることにした。「今日、弁当忘れちゃってさ、しょうがなく、ジャムパン。うどん、うまそうだな～」

美緒は、医学部志望のウザイやつがやってきたと内心思ったが、自分と同じく、弁当を忘れてきたと言ったことになんだか共感を覚えて、返事をしてやることにした。「へ〜、朝寝坊して、飛び出してきたんでしょ。秀才の鳥羽君でも、ドジッたりするんだ。それが、美緒も。朝寝坊しちゃって、弁当作れなかった。でも、学食のきつねうどんは、好き。甘いアゲのファンなの」

幸運にも返事をしてくれたことに有頂天になったが、即座にゆう子先輩のことを聞いて、へそを曲げられては、せっかくのチャンスを失うと思った鳥羽は、美緒の志望大学のことを聞くことにした。「美緒さんは、どこの大学を受験するの？」今のところＦ大学に合格する見込みがなかったため、受験のことは聞かれたくなかったが、返事をしないわけにはいかないようで、一応返事することにした。

「第一志望は、Ｆ大学。高望みだけど」鳥羽は、ゆう子先輩と同じＦ大学と聞いて、チャンス到来と思った。「そうか。Ｆ大学か。高望みってことはないさ。きっと、合格するよ。美緒さんは、日本史が得意だったね。きっと、合格するさ」美緒は、たとえお世辞でも、合格すると言ってくれたことにうれしくなった。「そうかな〜、受かるといいんだけど。でも、英語がからっきしダメだから」

　がっかりしたような表情をして箸をトレイに置いた美緒が、なんだか、かわいそうになった。とにかく、話を続けるためにも励ますことにした。「まだ、受験まで、たっぷり時間があるじゃないか。頑張れば、きっと、合格するさ。大切なのは、合格してやるぞ、って言う気持ちだよ。Just try. You can do anything you put your mind to.っていうじゃないか。やればできる何事も、ってことだよ」

　英語の部分は、ちんぷんかんぷんでまったくわからなかったが、鳥羽の励ます気持ちは十分伝わってきた。美緒はＦ大学受験を半分あきらめかけていたが、励ましてもらったおかげで少し気分が楽になった。合格できるような気分になった美緒は、鳥羽への感謝を込めて、ニコッと笑顔を作り元気よく返事した。「ありがとう。元気が出てきた。鳥羽君って、顔に似合わず、口がうまいのね。いま、先輩から英語を習ってるの。とにかく、やるっきゃないね」

　先輩と聞いた瞬間、グイッと美緒を見つめた。ついにチャンスが舞い込んできたと思い、間髪入れず質問した。「先輩って、誰？」美緒は、何気に答えた。「新体操の先輩でゆう子先輩。鳥羽君が目をギラギラさせて、シャッターを切っていたグラドルのゆう子先輩。そう、今、ゆう子先輩のうちに下宿させてもらってるの。だから、いつでも教えてもらえるってわけ。すっごく、ラッキー」

鳥羽はしめたと思い、ゆう子のことを質問しようと口を開いた時、突然、鳥羽の頭上から聞きなれた声がした。「おい、美緒とデートか？こいつ、隅に置けないやつだ」鳥羽の左横に写真部の小松がにやけた顔で突っ立っていた。誤解されたと思った美緒は、即座に返事した。「何、言ってるの。ちょっと、話してただけ」そう言い終えた美緒は、すっと立ち上がりカウンターにかけて行った。

獲物を取り逃がしたような目つきでじっと美緒の後姿を見つめていた鳥羽だったが、ほんの少し手ごたえを感じ、心でほくそ笑んだ。「ちょっと、お邪魔だったかな。ワリ～ワリ～」小松は頭をかきながら謝ったが、鳥羽は、平然とした顔で返事した。「いや、別に。ちょっと、志望校のことを話していただけだ」軽くいなした鳥羽は小松を無視して、食べかけのイチゴジャムパンを右手につかみ、出口に向かって歩き出した。

高望み

美緒は、最近、なんとなく元気が無いゆう子のことが気になっていた。ゆう子は、けだるそうにベッドの端に腰かけ、魂の抜け殻のようにぼんやりして、美緒のことは頭にない様子であった。いつもならば、９時過ぎごろから美緒の左横に腰かけ、英語を教えていた。美緒はゆう子がやってくるのをじっと待っていたが、９時を２０分過ぎても身動き一つしなかった。

あまりにも覚えが悪い美緒のことが嫌いになったのではないかと不安に思い、うつろな眼で壁を見つめているゆう子に声をかけた。「先輩、元気ないですね。何か、心配事でもあるんじゃないですか？」声をかけられたゆう子は、ハッと我に返り、返事した。「え、どうしたの？あ、勉強ね。もう、９時過ぎてるじゃない。ごめん」ゆう子が立ち上がろうとした時、美緒が先に立ち上がった。「先輩、最近、ぼんやりしてますよ。何かあったんじゃないですか？一人で悩むのは、よくないと思います。美緒でよかったら、話してください」

学校でもぼんやりして、授業にも身が入っていないことは、自覚していた。特に、悩みがあるわけではなく、今一つ、気合が入らないのだった。将来のことを考えれば考えるほど、自分のやるべきことが分からなくなり、勉強していても集中力が続かず、いつの間にかぼんやりしてしまうのだった。最近では、友達と話をしていても、「聞いてるの？」って言われるようになっていた。

勉強机の左横の丸椅子をひょいと右手で持ち上げ、、ゆう子の前に置くとドスンと腰かけた。そして、憂鬱そうなゆう子の顔をグイッと見つめると美緒は語気を強めて言い切った。「もしかして、美緒があまりにもバカだから、教えるのがあほらしくなったんでしょ」ゆう子は、自分の態度がそんな風に思われていることに愕然とした。背筋をピンと伸ばし、マジな顔つきで即座に打ち消した。

「違うわよ。美緒は、熱心だし、頑張り屋じゃない。ほら、今回の模擬試験の英語の偏差値、２も上がっていたじゃない。頑張ったじゃない。この調子。きっと、合格できる」美緒は褒められてうれしかったが、素直に信じることができなかった。「でも、本当に、合格できるの？こんなバカでも。美緒は、どうしても合格したいのよ。頼りは、先輩しかいないし。この通り、見捨てないでください」

美緒は、観音様に拝むように両手を顔の前で合わせ、頭を下げた。ゆう子は、あまりにも真剣な美緒に度肝を抜かれた。「やめて、そんなの。美緒は、大丈夫よ。きっと、合格できるって。でも、どうして、そんなに大学に行きたいの？確かに就職難だけど、女子は、大学に行かなくっても、就職できると思うけど。何か、資格を取りたいの？」美緒は、大学に行きたい理由を即座に言えなかった。

大学に行きたい理由は、おっさんデカことサワピ～と結婚したかったからだったが、そんなことを言えば、笑われるような気がして、口にできなかった。美緒は、うつむいてしょげてしまった。「何か深いわけでもあるの？大学に行くことは、すっごく、いいことだから、応援するけど、美緒の頑張りを見てるとマグマのような熱い気持ちを感じるの。ゆう子は、そんな美緒を見習いたいのよ。参考までに、聞かせてほしいな」

もし、黙っていると、ゆう子を怒らせてしまうようで、それかといって、おっさんのサワピ〜と結婚したいから、といえば笑われるような気がして、どうしていいかわからず、顔が真っ赤になってしまった。「いいのよ、人に言えないこともあるし、悪かったわ。美緒は、向上心があって、大学を目指しているんだから、理由はともあれ、立派なことよ。それに比べて、優柔不断で、勉強もろくにせず、のほほんと毎日を過ごしてる自分が、情けない。美緒を見習わなくっちゃ」

美緒は、何か買いかぶられてしまったようで、ここのままでは、気持ちの整理がつかなくなってしまった。「先輩、別に言えない理由じゃないんです。大それたことじゃないんです。絶対に、笑わないでください。いや、やっぱ、笑われる」美緒は、顔を激しく左右に振った。大学進学の理由で笑うようなことがあるとは、考えられなかった。「何言ってるの。笑うだなんて。美緒の熱い気持ちを見習いたいだけよ」

美緒は、笑われると思ったが、黙っていると負い目を感じて勉強に身が入らなくなるような気がして、恥を忍んで、一気に話すことにした。「本当に、笑っちゃ、いやよ。約束して、先輩」眉毛を八の字にしたゆう子は、いったいどういうことかと首をかしげた。「笑うだなんて、とんでもない。聞かせて、美緒」美緒は、大きく深呼吸すると、１０メートルの高さの飛び板から、真っ逆さまに飛び降りる覚悟で声を発した。

「それは、サワピ～と結婚したいからです」美緒は、真っ赤になって、うつむいてしまった。ゆう子は、初めて聞くサワピ～とはだれか、即座に尋ねた。「サワピ～って、いったい誰？クラスメート？」あまりの恥ずかしさに口が動かなかったが、この際、すべてを打ち明けることにした。真っ赤な顔を持ち上げると、つぶやいた。「その～、サワピ～って、例のデカ」言い終えると、さらに顔を赤らめて、コクンと首を折った。

デカと聞いても今一つピンと来なかったが、急死した父親のことで刑事に事情聴取されていたことは知っていた。それにしても、刑事と結婚したいとは、想像を絶することだった。おそらく刑事であれば、結構年を食っているのではないかと思えたが、そんなおじさんと結婚したいと思う美緒の気持ちがまったく理解できなかった。事情聴取されている間に刑事のことを好きになったと思われたが、美緒を虜にした刑事に興味がわいてきた。

「例のデカって、急死したお父さんのことで話を聞きにやってきた刑事でしょ。刑事さんね～、ふ～～ん、どんな人？」美緒は、ただ、いつの間にか、好きになっていた。何か、イケてるところを思い浮かべたが、これと言ってイケてるところはなかった。「それが、なんというか、ダサくて、ブサイクで、オッサンなんだけど、なぜか好きになったの。美緒は、お父さんみたいなおじさんが好きなの。へン？」

好みは十人十色だから、美緒の言うことに反論はなかったが、美緒がおじさん好みであることに、ただただ驚いた。「まあ、ヘンってことはないと思うよ。恋愛に年の差はないと思うし、芸能人には３０歳以上離れた夫婦もいるじゃない、ヘンじゃないけど、驚いたな～～。結婚したいってことは、相手の刑事さんも結婚する気があるってこと？」返事に詰まり、美緒はしばらく黙っていたが、単なる片思いである事を告げた。

「まあ、そういわれると、なんだけど、単なる片思い。何回かデートしているうちに、わかんないけど、結婚したいって思うようになったの。やっぱ、ヘン？」ゆう子も小学生のころから好きだった勇樹のこと思い出したが、好きになった具体的な理由は思い当たらなかった。好きという気持ちに理由はないように思えてきた。しかも、今でも勇樹のことを思っている自分がいることに、いまさらながら不思議に思えてきた。

「美緒は、美緒でいいと思う。恋愛に関しては、おくてだし、自分でもよくわかんないし。とにかく、理由はともあれ、大学に進学することは、将来の選択肢を増やすことになるじゃない。わたしも、表向きは、教師になりたいと思って大学に進学したんだけど、本音は、大学で自分の将来のことをじっくり考えたい、って思ったの。今、将来のことを考えているんだけど、自分は何をしたいのか、さっぱりわかんないって感じ。でも、こんなに悩める時間が持てるなんて、贅沢よね。大学生の特権じゃない」

美緒は、なんだか話が難しくなり、しかめっ面になってきた。「美緒は、バカだから、難しいことはわかんないけど、とにかく頑張って、大学に行きたい。そして、サワピ～と結婚したい。でも、こんなバカでも、行けるの？今の偏差値じゃ、絶望的、あ～～、どうしよ～～」顔を両手で覆った美緒は、悲鳴を上げながら激しく顔を左右に振った。ゆう子もこれから頑張っても、なんだかＦ大学に合格できそうにないように思えてきた。

ここ数年、福岡市の人口が増加するにつれてＦ大学の志願者も増加していた。来年度はもっと競争率が高くなるのではないかと不安になった。高望みをするより、自分の背丈にあった大学を狙った方が、美緒のためではないかと思った。不合格になって、再挑戦するために浪人したとしても、美緒の記憶力を考えるとＦ大学に合格するほどまでに偏差値が上がるようには到底思えなかった。

ゆう子は、美緒の気持ちを今一度確認した。「美緒、どうしてもＦ大学に行きたいの？もっとやさしい大学とか、短大じゃ、ダメなの？」美緒は、一瞬、考え込んだ。Ｆ大学にこだわらなくても、もっと偏差値の低い大学があるのか。そう思った時、サワピ～の顔が思い浮かんだ。サワピ～は、ブサイクでアホそうに見えるけど、東京からやってきた刑事だもの、きっと一流大学を卒業している、そう思った瞬間、やっぱ、Ｆ大学に行きたくなった。

「まあ、そういわれるのも、もっともなんだけど。九州の私立大学としては、Ｆ大学って、東京じゃ、結構有名っていうじゃない。サワピ～は東京から福岡にやってきたと言ってたの。だから、きっと、東京の一流大学を出てると思うのね。だから、できれば、東京でも有名なＦ大学に行きたいの。高望みとは分かっているけど、どうにかしていきたい。やっぱ、こんなバカじゃ、無理？」

ゆう子は、励ましたい気持ちはやまやまだったが、今の美緒の学力では無理だと思った。諦めた方がいいと言いたかったが、そんな冷たいことは言えなかった。「まあ、やるだけは、やりましょう。とにかく、応援するから。死ぬ気でやれば、何とかなるわよ。やるっきゃない、ガンバ」美緒は、目を吊り上げ、右手の拳骨を作り、ガッツポーズをとった。「死ぬ気でやってみせる。サワピーと結婚できるなら、死ぬ気でやれる。先輩、やります、ビシビシ特訓してください、お願いします」

美緒のやる気には、感心したが、単なる片思いでサワピ～と結婚できると思い込む気持ちは、まったく理解できなかった。でも、いかなる理由であれ、ポジティブであることが大切で、その結果、目標が達成できれば、それでいいように思えた。大学に入学できても、毎日ぼんやりして、怠惰な生活を送っている自分が恥ずかしくなった。その時、いつも気合を入れてくれた篠田教頭の顔が脳裏に浮かんだ。

ゆう子姫とひこ星

　篠田教頭は、日本労働党公認で参議院議員に立候補するために辞職を申し出ていたが、糸島中学をさらに発展させてほしいと教育委員会に説得されて、今年度から糸島中学校長に着任した。ゆう子は、夏休みに入る前に、大学合格の報告をしたかった。校長と約束を取ったゆう子は、糸島中学校長着任祝いもかねて篠田校長に会いに行くことにした。約束の午後３時、歴史を感じさせる檜木で作られた格調高い校長室のドアを２度ノックした。それに応えるように、即座に、威厳のこもった懐かしい声が返ってきた。「お入りなさい」

　ゆっくりドアを開け、そっと中を覗き込むと、すっと立ち上がる金縁メガネの校長の姿が目に飛び込んできた。「お入んなさい。久しぶりね」両手を重ねて前にそろえたゆう子は、ソファーまでおしとやかに歩いて行った。「少し、大人になった感じじゃない。聞いたわよ、見事、Ｆ大学に合格したって。合格おめでとう。夢への第一歩ね。さあ、お座んなさい」夢を失っていたゆう子は、何か後ろめたい気持ちで、うつむいてゆっくり腰かけた。

　「元気がないわね。そんな、暗い顔をして、もう、大学生なんだから、シャキッとしなさい」校長の声を聞いているうちに、中学の頃、ＩＴＣ４８の仲間と無我夢中でダンスを踊っていた自分の笑顔が、脳裏のスクリーンいっぱいにクローズアップされた。その時、何か、夢の原点に返ったように思えた。笑顔を作ると左手に持っていた菓子折りを差し出した。

「無事、Ｆ大学に合格できました。報告が遅くなって、申し分けありません。教頭、あ、校長に、いろいろとご指導いただいたおかげです。ありがとうございました。校長に昇格されたんですね。すごいですね。おめでとうございます。これからますます、糸中も有名になりますね」校長は、ほめられて苦笑いした。
「そう、５月のゴールデンウィークに、横山がＴ大学合格の報告に来たわ。ゆう子に会いたいって、言ってたわよ」

横山からは、合格してすぐに報告を受けていた。里帰りした時には、会いたいとも言っていた。「はい、夏休みの里帰りのときに、会いたいと思っています。さすが横山。横山だったら、世界一の裁判長になれると思います。それに比べ、何か、ダメなんです。自分でもわからないです。なぜか、やる気が出ないんです。授業中も、ぼんやりして、集中できないんです。せっかく、英語科に入れたというのに。やはり、教師に向いてないってことでしょうか？」

中学のころと一向に変わってないと思い、一度、うなずき、返事した。「中学のころと、まったく、変わってないわね。素直なようで、素直じゃない。要は、教師になりたいという強い意志はないってこと。でも、誰だって、自分のことって、わかんないものなのよ。わたしだって、教師に向いていると思って、教師になったわけじゃないわ。とにかく、チャレンジしたの。やってみなくちゃ、自分も見えてこないのよ。案ずるより産むがやすし，って言うでしょ」

ゆう子は、なんでも、やる前からいろんな不安が込み上げてきて、躊躇する癖があった。恋愛もそうであった、恋愛してみなければ、相手の気持ちも自分の気持ちもわからないはずなのに、恋愛する前から、相手の気持ちや自分の気持ちを決めつけてしまうところがあった。美緒のように無心になって恋愛に飛び込む勇気がなかった。何か、弱気で、優柔不断で、失敗ばかりを考えて、第一歩を踏み出せないところがあった。

「はい、やっぱ、ダメですね。この性格、治らないんでしょうね。臆病なんです。すぐに逃げ出そうとするんです。本当に、やってみなきゃ、わかんないのに。教師になる前から、しり込みしてるんです。結局、親の希望を叶えるために、大学に入ったのでしょうか？自分の夢が、見えてこないんです。こんな気持ちで、先生になんて、無理ですよね。このままでは、大学も、卒業できるか、どうか？」

人というのは、弱いものだと分かっている校長は、笑顔で答えた。「何、そんなに、落ち込んでるの。今言ったでしょ、誰だって、自分のことなんて、分からないのよ。性格のことをとやかく言うぐらいだったら、まずは、やってみることよ。そうだ、夏休みに、１年生の補講授業をやってもらおうかしら。それがいい。ゆう子、教えてみなさい。教えるということは、どういうことか、自分なりに考えてみなさ」

教師の資格もないものが授業をして、英語を習い始めた１年生に英語を嫌いにさせては、申し訳ないと思い、ゆう子は、即座に断った。「それは、できません。教師の資格もないし。家庭教師の経験はあるけど、教壇に立って教えるなんて、絶対にできません。生徒たちから、ダメ出しを食らうに決まっています。きっと、校長に迷惑をかけることになります。授業を見学させていただくだけで、十分です」

校長は、うなずき、返事した。「先生の補佐として、教えてもらうのよ。でも、見学だけでは、ダメ。教壇に立って教えて初めて、教えるということの喜びが実感できるの。とにかく、自分なりに情熱をもって全力で教えてみなさい。英語の勉強は楽しい、っていう気持ちを伝えればいいの。自分の気持ちに素直になれば、必ずできます。英検１級を持ってるじゃないの、自信を持ちなさい。よし、大学を卒業したら、糸中の英語の先生をしなさい。そして、英語の成績、全国一にしなさい。分かった？」

ゆう子は、躊躇したが、校長の好意を無駄にしたくなかった。とにかくやってみる決意をしたゆう子は、目を輝かせ、返事した。「はい、やってみます。自分の気持ちを伝えてみます。生徒を前にすれば、今までに無かった自分が現れてくれるかもしれません。ダメ出しを食らうかもしれません。でも、それが現実の自分だと思います。ぜひ、チャレンジさせてください。後輩に胸が張れる先輩になれるように、全力でやってみます」

校長は、ニコッと笑顔を作り、うなずいた。「そうよ、それでいいの。誰だって、弱いものなの。自分を責めずに、チャレンジしなさい。与えられた道なんてないのよ、道なんて、歩いた後にできるの。手探りでいいの。転ぶこともあるし、傷だってできる、泣きたい時だってある、もう歩きたくないって思う時もある、でも、それでも、歩くの。歩くことが、それが、人生よ。第一歩を踏み出しなさい」

校長は、ゆう子が口に出さなくとも、心の奥底に消すことができない悩みをちゃんと知っていた。それは、天国に行ってしまった勇樹への恋心との葛藤だった。「ゆう子、少しは、元気が出た？誰だって、弱いのよ。先生も同じ。強がっているだけ。何回も失恋して、結婚も失敗して、心は傷だらけ。でも、生きてる限り、歩き続けなくっちゃ。ゆう子のひこ星も、きっと、ゆう子が歩き出すことを願っていると思う」

そう言い終えた校長は、そっと席を立ち、窓際から掛け声を出し合い練習に励む野球部員たちを見つめた。“ひこ星”ゆう子は、ハッとした。どうして、そんなことを。突然、脳裏のスクリーンに夜空に光り輝く天の川が現れた。そして、西の夜空を懸命に走っているひこ星が、東の夜空の寂しそうなゆう子姫に声をかけた。「しょげた顔は、似合わんばい。さあ、走らんか、なんばしよっとか」